

東南アジア研究センター 1967年度第1・四半期報告

1967年4月から6月にかけての1967年度第1・四半期における東南アジア研究センターの活動状況を要約報告する。

本年度は第1期5カ年計画の最終年度にあたり、これまでの現地調査研究のとりまとめと、第2期計画の策定に主力をそそぐ。

新年度人事として、飯島茂助手が農学部助教授に昇任し、後任に福井捷朗大学院学生が採用された。

現地調査研究としては、タイ国近代史の研究をすすめるかたわらバンコク連絡事務所の所長をつとめた石井米雄助教授(東南ア研)が研究を終えて4月に帰国した。かわって福井助手(東南ア研)が所長代理として赴任し、同時にタイ国米穀局試験場で植物栄養学の実験研究を行っている。3月からタイとマレーシアで灌漑排水の調査をすすめていた富士岡義一教授と海田能宏助手(農)は4月に、また昨年8月以来メナム沖積平野の地質学的調査研究に従事していた高谷好一研究生(工)は6月に帰国した。

交換計画として、わたくしは4月、アメリカの関係機関を訪問した。外国からの訪問客も多く、とくに London 大学の C. A. Fisher 教授(東南アジア地理学)、東南アジア史の権威である Ohio 大学 J. F. Cady 教授の名をあげておきたい。また研究例会では Hull 大学の Wilson 教授の報告もあった。

東南アジア農業技術シンポジウムが6月に開催され、センター側の研究者と、外務・農林・文部各省その他関係機関の農業技術協力実務担当者との活発な討議が行なわれた。

出版計画としては、Reports on research in Southeast Asia の Natural science series No. 2; Tadayo Watabe, *Glutinous Rice in Northern Thailand* が出版された。これは東南アジアのもち米について世界ではじめてのまとまった研究である。さらに年刊「東南アジア研究センター所報」Ⅳが予定どおり刊行された。

本年度より、社会構造研究部門と資料部とが正式に設置された。センターが組織としてもますます充実してきたことをよろこばしく思う。

1967年6月

京都大学東南アジア研究センター所長

岩 村 忍